

## マルセイユ旧港の戦災都市復興におけるフェルナン・パイヨンの参画 自伝『石叫ぶべし』にみられる計画論と地中海的ヴィスタの形成

Fernand Pouillon's Involvement in the Urban War Reconstruction for the Old Port of Marseilles

His planning theory as seen in his Autobiography *Memoire d'un Architecte* and the formation of the Mediterranean vista

○松原 康介\*  
Kosuke Matsubara

The purpose of this study is to clarify the Fernand Pouillon's involvement for the reconstruction of the Old Port of Marseille through a close reading of "*Memoire d'un Architecte*". After the destruction of the old city by the Nazis, E.Beaudouin's plan was frustrated and the reconstruction started from zero. R.Expert's budget plan failed, and A.Leconte's plan was unpopular because it was overscaled. Pouillon was entrusted with La Tourette, but it was an "exile to the heights". Pouillon developed his own style of using stone through the implementation of the Marcerou's stone and the study of Le Thronet Abbey. With the support of Mayor M.Carlini and MRU's P.Daloz and P.Herbé, Pouillon organized an alternative plan based on the previous plans, and the replacement of Leconte with Perret was realized at the Supreme Council of Architecture. As a result, a spatial diversity with the vistas of the Mediterranean characteristics was realized in the Old Port.

*Keywords*: diversity, the Mediterranean, Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme, École des Beaux-Arts, Algiers, Toru Araki  
多様性、地中海、復興都市計画省、エコール・デ・ボザール、アルジェ、荒木亨

### 1. 研究の背景と目的、方法

#### 1-1. 研究の背景

「北アフリカの門」マルセイユは、地中海地域の多様な文化が煮詰められた旧市街を擁するが、第二次大戦で旧港(vieux port)地区を中心に大きな戦災を被った。しかしその復興都市計画については、フランス第二の都市という格から考えて十分に知られているとは言い難い。実際、今日の旧港地区一帯は、近代的ながら一見して独自性がわかる石造りの集合住宅、アール・デコ、そして中世にも遡る歴史建築等が混在している。ヴィスタ(眺望)の開けた多様性豊かな空間は、戦災復興を通じてどう形成されたのであろうか。

ここで注目されるのが、一般的にオーギュスト・ペレ(1874-1954)の筆頭業績と称されている復興事業<sup>1)</sup>の、影の立役者であった地元出身の若手フェルナン・パイヨン(Fernand Pouillon; 1912-1986)である。後年パイヨンは、冤罪によって逮捕・投獄されそのキャリアを絶たれるという不幸を経験したが、獄中では小説『粗い石』(原典 1964: ドゥ・マゴ文学賞(Prix des Deux Magots))を執筆し、更に半生を振り返った詳細な自伝『石叫ぶべし』(原典 1968)<sup>2)</sup>を残している。その序盤には、自ら参画した旧港の復興事業の複雑極まる経緯が、ナチスによる破壊、市政の転変といった背景を踏まえ、時にユーモアと皮肉を交えつつも克明に描かれている。

既往研究の動向を見ると、ジャン＝リュシアン・ボニーロが都市計画的視点で成書<sup>3)</sup>を出版している<sup>4)</sup>。特に復興建築の設計者をリスト化することで、パイヨンを含むクレジットを明示している。マルセイユの通史を扱ったアレッシ・デルンブリア<sup>5)</sup>は、ペレが上位にいたことを認めた上で、パイヨンが「ラ・トゥーレットと旧港のいずれをも手に入れた」と表現している<sup>6)</sup>。旧港に言及するパイヨンの作品論<sup>7)</sup>も多いが、詳細な分析には手が回っていない。未だ不明点の多い

旧港復興の経緯<sup>8)</sup>を、当事者による主観ではあるが内容が豊富な自伝から掘り起こすことが考えられるのである。

#### 1-2. 研究の目的

そこで本研究では、『石叫ぶべし』を一つの全体として精読することを通じて、事実関係を抽出・整理し、既往研究とも突き合わせながら文脈的に再構成することで、旧港復興におけるパイヨンの参画活動と計画論、及びそこからみた形成空間のマルセイユらしい特徴の解明を目的とする。

#### 1-3. 研究の方法

自伝を一次資料として主題的に引用・分析するにあたり、本稿では、仏語原典を踏まえながらも、1976年に出版されていた荒木亨(1931-2009)による邦訳『石叫ぶべし』<sup>24)</sup>を適宜修正しながら用いる<sup>6)</sup>。『石叫ぶべし』の記述は濃密で固有名詞も頻出し、テキストだけでは復興の全体像の把握は難しい。図面類や写真、雑誌記事等の一次資料(既往研究からの再引用も含む)により補足する。『石叫ぶべし』からの引用に限り、鍵括弧引用・段落引用ともに回数が多いことを考慮し、引用後に(p.X)とゴシック体でページ数のみを示す。

旧港の復興は、古代より地中海地域との往来を支えてきたマルセイユの核心の再構築であった。まず、旧市街の形成と老朽化を概括する(2章)。続いて、戦災の状況と、戦後市政における混乱の中でパイヨンが「追放」されるまでを戦史、政治史を踏まえて明らかにする(3章)。石材ルートの確保や地域の歴史的建築調査を経て、パイヨンが主導権を握っていく過程を建築史も踏まえて明らかにする(4章)。ファサード分析を踏まえて、パイヨンの計画論がいかにか今日の旧港地区に体现されているのかを検討する(5章)。

#### 1-4. 仮説としての「事件の経過」

「いつ頃私の没落が始まったのだろう。知らずに私がもっていた種子がいつ成長したのだろう」(p.16)という自問から、

\*正会員 筑波大学理工情報生命学術院社会工学域都市計画分野・国際総合学類国際開発学専攻  
University of Tsukuba, Graduate School of Systems and Information Engineering, Urban Planning Studies

自伝は書き起こされる。旧港の復興事業がペレの業績に帰されることとなった件については、こう記述されている。

事件の経過についてすっかり通曉しているマルセイユの高級官僚が、意地悪く私にこういったのである。「ペレのファサードはまったく見事ですな。」(ペレの)名前はそのまま残った。こうして旧港のファサードが比較的美しいと気がつくと、作者の名が変わるのである。《中略》私は腹が立たなかった。それを第一に考えないためには私は建築を愛しすぎている。無名は私を困らせはしない。(p.109)

旧港の復興は「事件」であり業績はペレに帰されているのが、経過はここまで語ってきた通りであると述べている。経過とは何か。そこにこの自伝を精査する意義がある。「これは恐ろしい物語である」(p.21)とプイオンは語り始める。

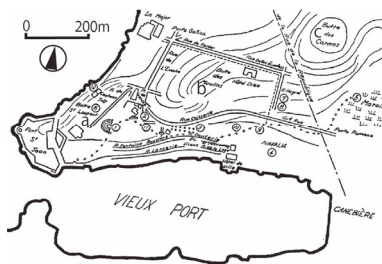
## 2. マルセイユ旧市街の形成と空間の老朽化

### 2-1. 旧港と旧市街の形成

前 600 年頃に来訪したギリシア系フォカイア人が、長さ 880m、幅 250m の巨大で穏やかなカラック(入江)を港(現・旧港)とし、北の丘に植民都市マッサリアを建てたのが都市の起源である<sup>6)</sup>。丘はサン＝ローランやムーラン、カルムなどの小丘から構成され、ミストラル(南仏の強い北風)を防いだ。前 4 世紀頃には地中海地域の交易港となり、6000 人ほどが 50ha ほどの城壁内に居住していた。ワイン、豚肉や魚の塩漬、香草・薬草、サンゴ、コルクを主な輸出品とした。前 49 年にカエサルに降伏した後は、東西軸を中心とする都市基盤を継承し、ローマ都市として発展した(図 1)。

15 世紀にプロヴァンス伯ルネ・ダンジューが城壁を拡張し、確定された約 67ha の城壁内市街地が、今日の旧市街である。港町として商業・漁業ギルドが発展し、マルセイユ商人は市政への影響力も強かった。1536 年には、オスマン帝国領内における通商の自由の保障であるカピチュレーションが初めて認められ、レヴァント貿易におけるマルセイユの優越につながっていく。1593 年にはペスト対策のため大規模病院オテル・デュエが建設された。17 世紀にはピュジェ兄弟により市庁舎、施療院が建築された(図 2)。

海に開かれている反面、マルセイユはパリの中央に対し度々反乱を起こした。ルイ 14 世はマルセイユ支配を強化すべく、港の入口にサン＝ニコラ、サン＝ジャンの両要塞を建設した。同時期にサン＝ローラン教会(起源は 7 世紀)も改築された。また港の南東に新市街を形成し、旧市街の富裕な



①劇場 ②アゴラ ③港 ④軍港 ⑤ギリシア海岸線  
⑥⑦⑧モザイク ⑨石柱 ⑩ローマの城壁  
⑪水道橋 ⑫ローマの住宅  
a. サン＝ローランの丘 b. ムーランの丘 c. カルムの丘  
--- 7 世紀の城壁 +++ 古代の海岸線

図 1 ギリシア・ローマ時代の都市基盤<sup>4)</sup>



①サン＝ジャン要塞 ②サン＝ニコラ要塞 ③市庁舎  
④ロンシュ広場 ⑤サン＝ローラン教会 ⑥施療院  
⑦オテル・デュエ ⑧新市街 ⑨ブルス ⑩共和国通り  
■ 15 世紀の城壁 □ 1943 年の爆破エリア

図 2 1914 年の都市基盤<sup>2)</sup>

商人が転入した。1669 年には財務総監コルベールにより自由貿易港に指定され、輸入品に対する関税が撤廃された。

19 世紀には資本主義経済が発展し、ブルス(商業会議所)を初めとする華麗な装飾の様式建築が建設された。南の丘にはノートルダム・ドゥ・ラ・ギャルドが改築され、見上げる住民のシンボルとなった。また、オスマニザシオンにより共和国通りが実現した。この都市改造は、老朽化した旧市街の衛生対策の意味もあったが、オスマン様式のアパートマンはパリ風に過ぎるとマルセイユっ子の間では不評だった。

### 2-2. 老朽化と治安・衛生状態の悪化

20 世紀に入ると、ギリシア以来の港は旧港と呼ばれ、旧市街は活気はあるものの老朽化、治安・衛生状態の悪化が大きな問題となっていた。1929 年に旧港を訪れたヴァルター・ベンヤミンの短い描写には、新聞スタンドのインク、公衆便所、牡蠣の露店からの臭気がハシーシュの煙と混じりあい、裏通りでは港湾労働者と娼婦がやりとりをする様子が退廃的に描かれている<sup>2)</sup>。住民の多くは外国の出自であった<sup>9)</sup>。

1932 年には景観設計の大家ジャック・グレバールが市役所周辺部の破壊を伴う複数の開削道路を計画している<sup>9)</sup>。41 年にウジェーヌ・ボードゥアン(Eugène Beaudouin; 1898-1983)がヴィシー政権(1940-1944)下で旧市街を担当(後述)した際には、旧市街は「不治の病(Condamné)」であり「清掃(assainir)」の対象であるとされていた(図 3)。

## 3. ボードゥアン計画の挫折と高みへの追放

### 3-1. ボードゥアン計画における旧市街の位置づけ

プイオンは、1931 年にエコール・デ・ボザールのマルセイユ校に入学し建築の勉強を始め、34 年に現在でいう単位取得退学をした。地元南仏で 8 年にわたり建築で生計を立てた後、1942 年に正式に卒業するためボザールに戻った。指導教員はボードゥアンであり、プイオンはその指導下で、マルセイユの仕事に 44 年 7 月まで従事した。「ボードゥアンは私に多くを教えて私に翼を与えた」(p.23)とある。

マルセイユは第二次大戦(1939-1945)下にあり、1940 年 6 月にはドイツ・イタリアによる空襲を受けた。ボードゥアンは復興のため市の主任建築家(l'architecte en chef)に任じられ、41 年 3 月に「マルセイユ市空間整備プロジェクト」(図 4)を策定していた<sup>10)</sup>。自伝には、「この巨匠の熱意は二次的な修復から始まって、主な道路はもちろん市全体を立て直す計画を彼に抱かせるにいたった。郊外までの自動車道路、



図 3 再開発計画を報じる記事(左側ボードゥアン顔写真)<sup>1)</sup>

交通に便するバイパス道路の計画、そして最後に唯一の寶石、旧港が位置する中心街である」とある(p.63)。

そこで図 4 をみると、旧市街を東西に開削する直線道路が複数計画されていることがわかる。とりわけ旧港の北側沿岸部では、ギリシア以来の東西軸に沿ってはいるものの広幅員の道路が計画され、その沿道も再開発エリアとされている。ムーランの丘に発展した急峻な市街地であったが、道路計画はこれを直線的に分断するものであった。

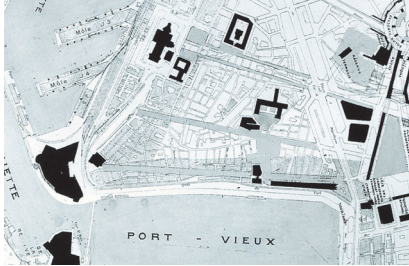


図4 マルセイユ市空間整備プロジェクト<sup>5)</sup>  
東西に延びるグレーの軸が計画道路

建築家としてのボードゥアンは、戦前からプレファブリケーションによる中高層集合住宅の発明に功績があり、パリ郊外の「ラ・ミュエット」(1934)やバニューの「野鳥の田園」(1935)等の大規模団地を先駆的に実現していた<sup>28)</sup>。その配置計画は、均質なモダニズムを基調としていた<sup>19)</sup>。本計画も、自動車優先で大規模区画から構成される一方、旧市街保全は考慮されていないが、これはボードゥアンとしてもグレバールらの先行計画の方針を踏襲したまどみられる。

### 3-2. ナチス・ドイツによる旧市街の爆破

状況は、1942年11月にドイツ軍がマルセイユを直接占領<sup>11)</sup>したことで一変する。旧市街が叛徒の巣窟であるとみなしたドイツ軍は、1943年1月、旧市街の広範囲にわたってダイナマイトで破壊したのである。自伝には、「その口実というのが迷路のように入り組んだ狭い道や階上や地下で連絡している建物では家宅捜索が難しいからというのである」(p.63)とある。これは19世紀の市民革命期において、オスマニゼーションがしばしば革命弾圧の手段であったことを彷彿とさせるが、実際、ドイツ将兵も旧市街を恐れていた<sup>10)</sup>。

爆破は、ボードゥアンが署名を強制された「退去地区図」(図5)に沿って住民を強制退去<sup>12)</sup>させた上で実施され、被害は25ha、1,500棟に及んだ。「退去地区図」は「マルセイユ市空間整備プロジェクト」の計画範囲に重なっており、後年ボードゥアンが対独協力の責任を問われる遠因となる。

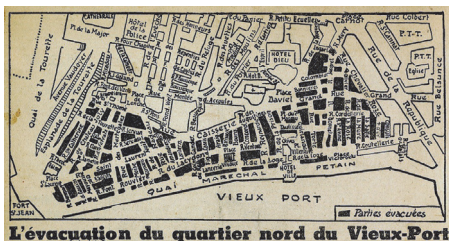


図5 旧港北地区の退去計画図  
黒塗り部分が退去地区 出典:1943.1.28 市広報

パイオンは、マルセイユの旧市街を「フランスで最もすばらしい特別な界限」と書いている。「全体が階段状円形競技場のようになっていて、教会や鐘楼、低い家々や立派な建築がアルジェのカスバのように多様さのなかに秩序のある、調和の取れた一体をなしていた」(p.64)と述べ、地中海の対岸アルジェのカスバを引き合いに、低層稠密で立体的な空間の調和を強調している。向かいの高い建物に住んでいた

パイオンは、その破壊の光景を直接に目撃していた。

トランク一つをもって追い立てられ、貨車につめこまれ(人間なら四〇人、馬なら一列に八頭である)、ヴェアマハトとその誇らしげな部隊がプレジユスの近傍につくった一種の強制収容所で無為に日を過ごして死んでいくことになる幾千の老人、子供、貧民の強制退去がどんなものか想像してもらいたい。こうして、不幸な人々は心地よい住み家、親しい生活、よい隣人、絵のような風趣をもった愛する街から永遠に追放されたのである。地中海のあらゆる流域からやってきた漁師、商人、行商人、娼婦が陽気にナポリ語で、ギリシア語で、スペイン語で、フランス語で、三メートルから五メートル幅の路上や、そんな所でもちゃんと大きくなるプラタナスの大木が陰をつくる泉を中心にした広場などで、門ごとに呼び交わっていた。(pp.64-65)

自伝の論調は、ナチスへの批判というよりは、強制退去させられる住民への憂慮、同情と、旧市街が喪失されることへの無念である。そこにパイオンが復興を志していく動機が認められる。港町マルセイユに様々な経緯で集まってきた雑多で貧しい人々の住む旧市街が体現していた多様性は、以後のパイオン作品<sup>3)</sup>の基本理念となるものでもあった。

### 3-3. 戦後市政とボードゥアン計画の挫折

1944年8月、ドイツ軍の撤退とともにマルセイユは解放された。市政はアルジェからパリに移転したド・ゴール臨時政府に帰属したが、マルセイユでは、レジスタンス出身の弁護士で社会党(SFIO)所属のガストン・ドフェール(Gaston Defferre; 1910-1986)<sup>13)</sup>が市長となり、ひいては南仏政界の大立者となった。ドフェールは非ド・ゴール、非共産の中道勢力を結集して戦後のマルセイユ社会を切り盛りしていくことになる老練な政治家であり、中道左翼紙「プロヴァンシャル(Provençal)」等のマスコミにも影響力を持っていた。

パイオンによれば、ドフェールはその社説において、旧市街の破壊に責任があるとしてボードゥアンを中傷したとされる。「巧みな政治家らしくドフェールはボードゥアンを選んだのである」(p.65)。パイオンの見るところ、それは濡れ衣であり、ドフェールが大衆人気を得るためのスケープゴートとしてボードゥアンが狙われたものであった<sup>14)</sup>。自伝では、ボードゥアンは10年近く中傷に苦しんだとある。また、この中傷が原因でクロディウス＝プティ(後述)がボードゥアンへ疑念を抱いており、パイオンが説明し打ち消したとある。師の失脚に対するパイオンの憤りは大きかった。

既述のように、旧市街の老朽化は戦前から問題視されており、ボードゥアンはモダニズムを踏まえて、それまでの計画方針を継承したに過ぎない。しかし結果として、復興の現場では、「三年にわたって蓄積されたボードゥアンの膨大な仕事を提示するのはもちろん考えられなかった」という事になったのである。住宅を失った3,000人が待ち望む中、それはほぼ白紙の状態から開始されざるを得なかった。

ドフェールは国政に転じるためいったん退き、税関職員出身で共産党(PCF)のジャン・クリストフォルが次の市長となった。彼は労働者を組織し復興に力を入れると同時に、先鋭的な実験であったル・コルビュジエのユニテ・ダビタシオ

ン(1949)の受け入れを決定するなど、モダニズムの強いシンパとしても知られた<sup>7)</sup>。ピヨンは44年から共産党に入党しており、「同志クリストフォル」を「感じのいい男で本物のレジスタンスの闘志である」(p.48)と評している。しかし、ドフェールの影響が依然として強いマルセイユでは、党絡みでの仕事のいざこざが増えようになり、ピヨンは嫌気がさして脱党した。このようにボードゥアンの部下であったピヨンは、復興事業の当初は脇役に甘んじていた。

### 3-4. 計画家の交代と「高みへの追放」

以後、ピヨンの筆致は辛辣な皮肉を交えつつ、主任建築家の交代劇により混乱する計画の経緯を描きだす。1946年、アール・デコを流儀とするロジェ・エクスペール(Roger-Henri Expert;1882-1955)が主任建築家としてMRU(Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme;復興都市計画省)から派遣されてきた。エクスペールは、「ピジェの市役所を中心にして一つの軸をまったく新しく創り出すことを考えた」(p.68)。エクスペール計画(図6)は、U字型の中層住宅7棟からなり、各棟に設けられた南北方向の通り抜け通路から開ける港へのヴィスタを意識した全体計画として特徴があった。ニューヨークの摩天楼のようであり、また17世紀の伝統にも沿っていた。このエクスペールの全体計画の下、個々の建築は地元建築家らに任せられるという体制であった。ピヨンもまた地元建築家として下働きをしながら、エクスペールを「典雅でスポーツマンらしいフランス学士院会員の老人」と、またU字型の建物(図7)の設計者である地元建築家の「頭目」(カステル)を悪趣味なペテン師と評している。結果として、その費用が高く不評となり、2棟のみの実現となった上、1947年秋にはエクスペール自身も解任された。



図6 エクスペール計画(1946.1)<sup>5)</sup> U字型建物群による全体計画

代わって主任建築家となったのは、アンドレ・ルコント(André Leconte;1894-1990)<sup>15)</sup>であった。ルコントは当初MRUの総監督官という肩書で、エクスペールの



図7 U字型の建物 中央に通路<sup>5)</sup>

予算支援を任務としていたが、やがて建築家の資格でエクスペール案を批判し、自らがとって代わったのである。「美しい友情の印象的実例である」とピヨンは皮肉っている。

ルコント計画の模型(1948年初旬:図8)を見ると、港に沿って長細く巨大な建物を並べ、ファサードを形成しているが、発表直後から不評であった。ピヨンはこれを「堤防」



図8 ルコント計画模型写真<sup>5)</sup> 左後方(矢印下)にラ・トゥーレットと皮肉っている「ルコントは内側に区画全体を閉じ込める長さ六〇〇メートルの一種の堤防を考えていて、三つの通り抜け通路が車の通行を可能にしていた。市役所の右手から堤防は共和国通りまで続いていた」(p.86)。それは、ルコントを補佐していたピヨンにとって、「約束された街路や広場はどこにあったろう」(p.73)と嘆かせるものであった。

そんなピヨンが煙たくなったルコントは、サン・ローランの丘のラ・トゥーレット(La Tourette)地区の担当に彼を任じる。「ラ・トゥーレットをやってください。全体のバックになるシルエット、ラ・トゥーレットの丘の風をきる建物はひじょうにだいじなんです」(p.73)。ピヨンにとっては初めて自身が主体となつての計画を任せられたのであり、「ルコントに心から感謝した」。しかし復興のメインはあくまでファサードであつて、ラ・トゥーレットの任命は「高みへの追放」に等しかつた、ともある。実際、「われわれをうるさがらせることがないよう、ピヨンには高いところ、ラ・トゥーレットをあずけたのさ。《中略》そこでピヨンは私の仕事をしてくれて、われわれを『平和』にしておいてくれるだろう」(p.76)というのが、ルコントの真意であつた。ピヨンは幾度も計画の改善を提案し拒否されたが、「そういったすべてが哀れで惨めであつた」(p.87)という有様であつた。

### 3-5. 小括

ピヨンは、旧市街爆破とボードゥアンの挫折を経て、復興参画への動機を得、旧市街の地中海的な多様性についての認識を新たなものとした。一方、エクスペールは予算問題で失脚し、代わつたルコントの計画もオーバースケール(後述)により不評であつた。ピヨンはラ・トゥーレットを任せられるが、それは「高みへの追放」に他ならなかつた。

## 4. ラ・トゥーレットから旧港参画への闘争

### 4-1. ラ・トゥーレット計画における石のモチーフ

1947年秋、ともあれピヨンはラ・トゥーレットにとりかかつた。その計画論は以下のようにある。

ラ・トゥーレットは全市を見下ろす一体を形作る。一方に旧港、他方は沖と港というその眺めはずばらしい。私は四つの建物の群を構想していた。構成の背景をなす第一の群は長さ一八〇メートルにわたる八階建てである。それから二〇階の塔、前には堂々たるらんかんと階段で接する高く美しい広場を取り巻く四階建ての建物二つがある。この龐大な全体にサン＝ローラン教会と一七世紀のその鐘楼、バラ色の石の得もいわれぬ丸天井がしっかりと組みこまれていた。総体のシルエットは旧港の右手でサン＝ニコラ要塞とうまく釣り合っていた。(p.79)

後年に *Techniques & Architecture* 誌で発表された計画図(図9)を見ると、サン＝ローラン教会をその一辺に取り込んだ中庭式(「高く美しい広場」=「歩行者用遊歩道」)の空間構成をとっている。中層と高層からなるシルエットは、後のア

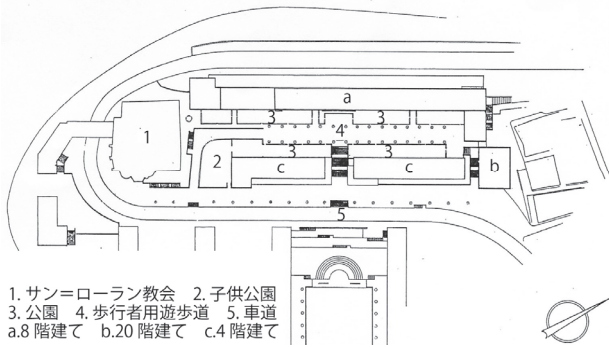


図9 ラトゥーレット地区計画図<sup>13)</sup>

子供公園、公園、歩行者用遊歩道が地区の中庭的空間を形成ルジュにおける地区計画にも通じるものがある<sup>30)</sup>。

また、『石叫ぶべし』において、建材である石材が最初に具体的に述べられたのもここである。こちらはサン＝ニコラ要塞の壁がモデルになったと述べられている。

六〇センチメートルの厚い壁に深くうがたれたくりぬき窓の配列の調和。私のつくる全体はサン＝ニコラ要塞の厚い壁に照応していた。ちょうど軒蛇腹のくり型模様が城のそれからインスピレーションを得たように、その材質と色が私のモデルとなったのである。《中略》構造システムはひじょうに簡単であった。垂直鉄筋コンクリートの骨組はまったく使わず、床だけがプレハブのセメントであった。ファサードの壁と縦の間仕切り壁は鋳型ベトンつまり木の板のなかに流され型取られたコンクリートからできていた。ファサードの枠組みは美しい堅い石の板に取って代られた。(pp.79-80)

石は、パイオンにおいて、その材質と色がまざりインスピレーションを与えるものだが、工法としても、構造耐力上主要な柱と壁は、厚さ 60 センチの石材を用いた組積造によって構成されていた<sup>16)</sup>。また、石造によるもう一つのメリットはその設計のスピードであり、前掲(図8)のルコント計画には、既に完成形態が表れている。石材を用いた集合住宅というパイオンのよく知られた作風は、後述の歴史建築調査と合わせて、この時に得られていることがわかる。

#### 4-2. マルスルー石の実装

石材はローマ建築に遡る伝統的な建材であり、南仏においては水道橋ポン・デュ・ガール(Pont du Gard)の建材として知られ、ブロンド色の石灰岩であった。しかし、「当時堅い石はまだ手と何千年来の道具で刻まれていた。エジプトやアッシリア以来、何の進歩も実現していかなかった」(p.77)とされ、扱いは難しかった。これを飛躍的に改善したのが、1943 年以來「お互い尊敬するか憎み合うかのどちらかになるようにできている」友人で、親の代からの石材職人であったポール・マルスルー(Paul Marcerou)である<sup>17)</sup>。

時の MRU 大臣ウジェーヌ・クロディウス＝プティ(Eugène Claudius-Petit; 1907-1989) (在任 48.9-53.1) は、戦前以来の CIAM の賛同者であり、当時進行中であったユニテ・ダビタシオンを盛んに支援し喧伝していた<sup>28)</sup>。しかし鉄筋コンクリートは当時まだ高価であり、現実には伝統的な石材に頼らざるを得なかった。1948 年に MRU がプレカット石材の活用のためのアイデア・コンペ<sup>18)</sup>を実施すると、マ

ルスルーはパイオンの協力を得てこれに応募する。この時マルスルーが発明したのが、石を容易に切断・加工出来る機械であった。フォンヴィエイユの採石場に拠点を置き、アトリエや事務所等をパイオンが設計した<sup>19)</sup>。競合他社に比べて圧倒的に廉価なプレキャスト石材の実装によりコンペに勝利したのである<sup>20)</sup>。大臣も、旧港の復興事業ではマルスルーの石材を採用することを決めた<sup>21)</sup>。

#### 4-3. ボザールにおける地域の歴史建築の研究・教育

石材への関心は、パイオンの研究・教育活動とも接続した。1948 年に「私は教授に選ばれ、エクス＝アン＝プロヴァンスのボザールに建築のアトリエが設けられることになった」(p.85)とある。学生にはイタリアやスペイン、フランス各地にデッサン修行に出ることを推奨し、また出身地の歴史的建築の目録を作らせた。その成果はパイオンを筆頭著者として出版された複数の本に結実している。

エクスを扱った『オールドナンス(間取り)』<sup>12)</sup>では、ミラボー通り(Cours Mirabeau; 1649)を中心とする 18 世紀の歴史建築と中庭、ファサード等の豊富な実測調査成果を図版として掲載している<sup>22)</sup>。また、『工匠—修道院の誕生』<sup>14)23)</sup>は、中世の修道院の実測から図面を起し注釈した作品である。シトー派の修道院建築は、過剰な装飾を嫌い、徹底して禁欲的で質素な石造であったことで知られ<sup>22)</sup>、ミストラルに抗する必要上、鐘楼までもが石造りであった<sup>31)</sup>。パイオンは、特にル・トロネ修道院(12 世紀)について、敷地にあった高低差を階段とスロープで巧妙に処理し、密かにイベリア半島のイスラーム建築の要素も取り込んだ中庭と回廊を持つ傑作としている。石材については、目地にモルタルを注入する余地がないほど完全な整形で切り出されており、「石の切断と敷設の真の傑作(véritable chef-d'oeuvre de taille et de pose de pierre)」と極めて高く評している。

小説『粗い石』もまたル・トロネ修道院を題材としたものであり、パイオンの建築思想における重要性は極めて高い<sup>27)</sup>。また、これらの活動は多くのボザールの学生と共に実施したものであったが、「私は私の生徒の大部分を私の事務所に入れた。彼らはどの大仕事にもあずかり、私の冒険についてきた」(p.86)とある。地域の実測を通じて育てられた学生達が、そのままパイオンの実務スタッフとなったのである。彼らの存在もまたパイオンの作風を形作っていくことになる。

#### 4-4. カルリーニ市政と MRU による介入

市政の潮目は、ド・ゴール派弁護士ミシェル・カルリーニ(Michel Carlini; 在任 47.10-53.5) の市長就任を機に変わろうとしていた。「とりわけ彼は旧港を愛して」おり、その一面に住んでいた<sup>24)</sup>。特にル・コルビュジエが理解できず、1949 年 6 月にオリオール大統領夫人の案内でユニテの現場を訪れた際には、自ら夫人に建設の中止を訴え、現場監理をしていた ATBAT のジョルジュ・キャンディリスと口論になっている<sup>28)</sup>。カルリーニの趣向はむしろパイオンに近かった。「彼と共に運命の道具が到来したのだ。最高指揮権への戦いが始まるようになっていた」(p.85)とある。

1950 年の半ば、パイオンはクロディウス＝プティ大臣の

官房長(chef de cabinet)であったピエール・ダロズ(Pierre Daloz;1900-1992)から、トゥーロンの休暇村レ・サブレット(Le Sablettes)の修復を任命された。ピイオンはこの仕事を通じてダロズの信任を受け、ひいては大臣と直接やりとりするようになる。ダロズは尋常の官僚ではなく、戦前はヴェルコール山地を拠点とし、20代には初登頂記録をいくつも打ち立てたアルピニストであった。その後7年に渡りペレの事務所で建築技術者としての研鑽を積んだ(1932-1939)。地勢に精通し強靱な身体を活かしてレジスタンスに身を投じ、いわゆる「ヴェルコールのマキ(Maquis du Vercors;内陸部隊)」の創設者となった人物である<sup>8)</sup>。アルジェでド・ゴール率いる自由フランスに合流し、やはりレジスタンス出身のクロディウス＝プティと知り合いその腹心となっていた。

ダロズと、技術官僚で建築家のポール・エルベ(Paul Herbé;1903-1963)<sup>25)</sup>は、ラ・トゥーレットとレ・サブレットを高く評価した上で、旧港計画をピイオンに相談するようになる。MRUでも、既にルコント計画は問題視されていた。

#### 4-5. 建築最高評議会

口火を切ったのは市長カルリーニであった。大臣がマルセイユに寄った際のアペリティフの場で、ルコント計画への不満を直訴したのである。ルコントも同席する場であった。煮え切らない大臣に、市長は公開質問状により追い打ちをかけた。ルコントは一切の変更に応じない姿勢をみせた<sup>26)</sup>。

ダロズとエルベは、元より建築的観点からピイオンを推すつもりで動いていた。ピイオンに、ルコント計画の修正案の作成を指示し、協力者として地元建築家のアンドレ・ドヴァンを紹介した。しかし、ルコントは業者に自らの工事を急ぐよう命令を出していた。「もし事件が十分長引けば、彼は建物を完成してしまい、大臣は試合を放棄するだろう」(p.92)という、一刻を争う事態となったのである。ピイオンは、「エクス最良の生徒たちに私のために働いてくれと頼むことに決めた」(p.93)。17-20歳の学生のチームに昼夜兼行で仕事を与え、彼らは旧港の仕事にやりがいを持った。

2週間で出来たピイオン案を、ルコントは大臣室で罵倒した。堪忍袋の緒が切れ、踵を返して出ていこうとするピイオンをカルリーニが強い力で引き留める。「あなた、あなたは始めるためにここに残るんですよ。この結果に終わるためにこれほど努力したわけではありません。どうかお願いですから落ち着いて座ってください」(p.95)。ついにルコントは建築最高評議会(Conseil supérieur de l'architecture)<sup>27)</sup>の場で決着をつけることを提案し、大臣をも同意させた。評議会は「10人近くの学士院会員、30人ばかりのローマ大賞、すべての『最高度の専門家』からなる、分野の最高意思決定機関であった。ルコントも、その構成員の一人であった。

評議会は1950年のクリスマスに開催された。ペレ、エマニュエル・ポントレモリらの大御所が、「教皇選挙会議の枢機卿のように会議室へ入った」(p.102)。ステッキと丸帽で歩くペレを見たゼルフェスが「自分の胸像を歩かせているとでもいうようだ」(p.102)とつぶやいた。氷のような静寂の支配する会議場で、目まいを覚えながらプレゼンを行う中、プ

イオンは、「やっと、いささか建築らしきものにお目にかかったぞ」というペレの賞賛の声を聞いた。その後の審議では、どうやらペレが断固としてルコント計画を拒否したらしいことを、後になって知らされた。ルコントは辞任した。

旧港は新たな犠牲者を生んだ。ポードゥアンはドフェールに倒され、エクスペールはルコントに、ルコントは私に倒された。大臣はそこでオーギュスト・ペレにルコントの後を継ぎ、ピイオンとドヴァンを助手につけるよう頼んだ。ペレはいうとおりにした。(p.104)

こうしてピイオン案が勝利したのである。しかしそれには、ペレが主任建築家に就任するという条件が付いていた。

#### 4-6. 小括

ラ・トゥーレットでモチーフを得たピイオンは、マルスルー石の実装と、ル・トロネ修道院の実測調査を通じて、整形な石材による作風を確立した。カルリーニ市長とMRUのダロズ、エルベらの支援を得たピイオンが代替案を策定し、建築最高評議会を経てルコントからペレへの交代が実現した。

### 5. ピイオンの計画論と形成空間

こうして参画を果たしたピイオンの計画論は、いかなる形で実現を見たのであろうか?ペレの下でピイオン、ドヴァンがとりまとめたとされる「マルセイユ旧港(Marseille Vieux-Port)」(1951)では、各建物の設計者は15ものグループに分類され、色彩は計画時期を示している。エクスペール、ルコントの計画による建物もみられる。従ってこれはペレやピイオンらによる一元的な全体計画ではなく、既存の計画を切り張りしたものである。これにピイオンによるファサード図(1950)を組み合わせ、図10を得た。

#### 5-1. 平面計画の特徴

四つの似たような建物と市役所の右手に五つ目、低い六つ目の建物が反対側のラ・トゥーレットの建築を思い出させる。入り口は小広場に変っていた。こうすれば新しい建物は港の水面の眺めを楽しむことができる。ファサードはすっかり変えられ、私は列を四メートルだけ歩道と河岸の全面にわたって前へ出し、石のブロックの仕切り壁に支えられたロジャア(回廊)をつかった。こうしてかなり重々しい外観にもかかわらず、くりぬかれた窓のガラスがファサード面積の八〇パーセントを占めることになった。(p.92)

ルコント計画の不評の点は、「河岸全体に、鉄筋コンクリートの庇が店を陽ざしから守るために歩道に沿って延び、ファサードは陰気で、釣り合いは疑わしく、小さすぎる通り抜け通路は折角のすばらしい景色を楽しむことを許さなかった」(p.86)ことであった。まずオーバースケールを避けねばならない。そこで、6つの小さな棟に分け、その間を小広場とすることで、旧市街側から旧港、ひいては南側の丘上にあるノートルダム・ドゥ・ラ・ギャルドのヴィスタを確保している。ロジャアは修道院の回廊を思わせ、ラ・トゥーレットでも用いられた空間要素で、「リヴォリ街のようなアーケード」であるとしてカルリーニが賛同していた。

また、小広場は、エクスペール計画から2棟のみ実現され

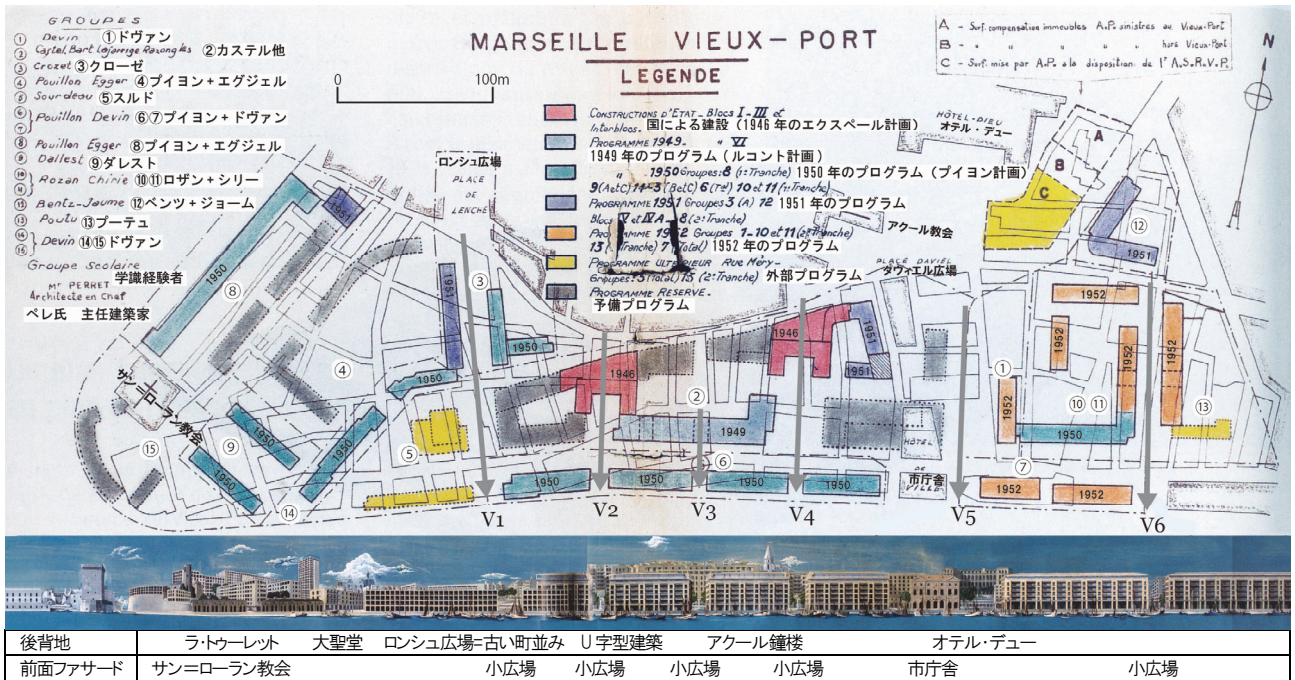


図10 プイヨンのとりまとめによる最終計画イメージ(「マルセイユ旧港(Marseille Vieux-Port)」+「ファサード図」) 出典:両図とも文献5から再引用  
Vと矢印はヴィスタを形成する各軸を示す

ていた U 字型建物の通り抜け通路の延長軸上に計画されている(V2) (図11)。また、ロンシュ (Lenche) 広場からアンリ・タツ通り沿道の2棟(設計はクローゼ)を経て直線的に小広場に至る軸も考慮されている(V1) (図12)。これで後背地からもヴィスタが拓けたのである。「堤防」の6分割により、既存の物を活かして整合化したものといえる。

### 5-2. 立面(ファサード)計画の特徴

沿岸6棟のファサードは、ピジェの市役所を中心に左右に展開する。外壁及び間仕切壁はマルスルー石による組積造であり、住宅はガラスの開口部を豊富に持つ。建物の高さは、爆破を逃れた古いアパートマンと同じく6階建てで、かつのスカイラインを再現しスケール感も継承されている。

部分的に破壊された旧港では、ヴォーバン風なあるいは中世紀の二つの要塞、サン・ヴィクトール、サン・ローランなどの教会、アクールの鐘楼、ピエール・ピュジェの市役所、アルドゥアン＝マンサールの市立施設院などを数えなくとも、数キロにわたる調和あるファサードが残っている。(p.93)<sup>(28)</sup>

実際、6棟の背後の丘には、サン＝ローラン教会、マルセイユ大聖堂、ロンシュ広場、アクール教会の鐘楼、ホテル・デュー等の歴史建築、及び旧市街の町並みが見え隠れしている。西端にはラ・トゥーレットも見え、前面の新しいファサードと、後背における古い町並みの組み合わせによる新旧の多様性が表現されている。



図11 U字型建物のヴィスタ 筆者撮影



図12 ロンシュ広場のヴィスタ 筆者撮影

## 6. 結論

### 6-1. 考察

プイヨンは復興事業の最中、最晩年のトニー・ガルニエ<sup>(32)</sup>に会っている。病床のガルニエはプイヨンに対し、「もう少し他人に対して好意を持ちなさい」と諭した。しかしプイヨンは、「若くいるかぎり私は寛大でもなく、好意的でもないだろう」(p.251)と顧みなかったという。プイヨンはこの逸話により、自身の人柄について、なにか非妥協的な私の強さ、融通の利かたさを伝えようとしているのだろうか。

しかし、本稿で明らかにしたところでは、必ずしもそれは当たらない。旧市街の移民への温かい眼差しや、師・ボードゥアンに向けられた誤解への憤慨は、むしろ他者への共感と、ある種の正義感を示している。中央から派遣されてきた主任建築家に対する、マルセイユ人らしい反抗心も、元はそこから来ている。そんなプイヨンの『叫び』に政治家からも共鳴し支援した、というのが「事件の経過」だったのである。

プイヨンはルコント自身とは激しく争ったが、先行計画を無理に否定することもなく、自らは柔軟かつ抑制的に6つの低中層住宅からなるファサードの計画に留めた。それが多様性を活かすプイヨンの計画論だったのである。南へ向かっては旧港、ひいてはノートルダム・ドゥ・ラ・ギャルドを臨み、北に向かつては斜面地の歴史的建築物が見え隠れする地中海的ヴィスタは、こうして実現したものである。

### 6-2. 後日談

その後、プイヨンはレ・サブレット、エクス「二百の住宅(Deux cents Lodgements)」等の作品を着実に実現していった。『オールドナンス』出版には、ダロズより信頼に満ちた序文が寄せられた<sup>(29)</sup>。順風満帆に見えたプイヨンの次なる目標は、旧港の対岸ファロの大規模都市計画であった。

1953年5月3日、しかし、カルリーニが市長選で敗退し

た。代わって市長となったのは、あのガストン・ドフェールであった。国政進出に目途をつけた上での再登板である。ドフェールは、ボードゥアンの旧部下が持参した石を好まなかった。こうしてパイオンは、またしても追放されたのである<sup>(30)</sup>。「ファロの失敗と共に私のマルセイユでの大きな活動は終わった」(p.130)とある。

同じ日、地中海の対岸アルジェにおいて、ジャック・シュヴァリエ新市長が誕生していた。パイオンに宛てた招聘の電報が届くのは、その翌日のことである<sup>30)</sup>。

#### 【謝辞】

本研究は科研費新学術領域研究「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」(18H05449)及び基盤 C「中東・北アフリカ地域におけるヘレニズム基盤の継承に関する都市文献史的研究」(21K04389)に基づき実施されました。

#### 【注】

- (1) 例えばフランス文化省のホームページ(<https://www.culture.gouv.fr>)では、André LECOMTE, Auguste PERRET, Fernand POUILLON, André DEVIN (architectes)の4名が挙げられている(21.04.25 閲覧)。
- (2) 原典 *Mémoires d'un architecte*(文献 15)の背景としては、一連の逮捕報道、それに『粗い石』とドゥ・マゴ文学賞受賞によって既に一般読者を広く獲得していたのを機に、冤罪の真相を質す意味でも自伝として出版したものと考えられる。少なくとも 1973 年、2004 年、2019 年に再版されている。出版の成果もあってか、パイオンは 3 年後の 1971 年に大統領恩赦を受けた。
- (3) 2007 年にブーシュ＝デュ＝ローヌ県主催、監修ポニーロにより旧港復興に関わる展覧会が開催され、パンフレットが入手可能である(21.04.25 閲覧)。  
[https://www.fncaue.com/wp-content/uploads/2015/09/brochure\\_vieux\\_port.pdf](https://www.fncaue.com/wp-content/uploads/2015/09/brochure_vieux_port.pdf)。
- (4) 仏原文文「il récolta les deux réalisations à caractère prestigieuses」。文献 9, pp.500-501。
- (5) ジャン・ピエール・フレ(文献 11)もこの点を示唆している。
- (6) 荒木は ICU で教鞭をとった仏文学者にしてキリスト者であり、その情熱からルトロネ修道院を舞台とする『粗い石』(文献 25)を訳し、続いて『石叫ぶべし』をも訳した。原題は *Mémoire d'un architecte* であり「ある建築家の回想」とでも訳すべきところであるが、聖書の言葉「このものがら黙さば石叫ぶべし」(レカ伝 19 章 40 節)に因んでタイトル付けることで、冤罪に苦しむ原著者に寄り添い、肉声を伝えようとしている点に特徴がある。しかし、『粗い石』が安藤忠雄の愛読書として 2001 年に再版されたのに対し、『石叫ぶべし』は長谷川堯により『新建築』で紹介(文献 23)されたのみで、長く絶版であり、これまで活用された形跡もみられない。文字通り知られざる訳業である。
- (7) 実際、ペレは高齢で事件解決の 3 年後となる 54 年 2 月に逝去しており、どこまで実働に関わっていたかは不明である。
- (8) 本稿は文献 17 を踏まえつつ、筆者による文献 29 を要約的に再構成する。
- (9) 深沢によれば、マルセイユ在住の外国人(イタリア、スペイン、アルメニア、トルコ・シリア・レバノン、ギリシア、ロシア等)は市人口総数の 1/3 を占めていた。文献 26, p.170。旧市街ではこれと同等かより多かったと考えられる。
- (10) 1941 年 5 月、法定計画として承認された。文献 18, p.57。
- (11) 連合軍が北アフリカに上陸したことを受けての対抗戦略であった。
- (12) 周辺含む約 4 万人の住民が強制退去によりフレジュスの収容施設に送られた。中でもユダヤ人は逮捕されアウシュヴィッツ等の刑務所に送られた。
- (13) 最初の市長任期は 1944 年 9 月から 45 年 11 月までであり、45 年に国民議会議員に当選した。8 年後に市長として再登板し 1953 年 5 月 3 日から 1986 年まで市長(国民議会議員、国務大臣を兼務)を務めた。
- (14) 実際、ボードゥアンの計画とナチスによる爆破との関連は否定できないとする既往研究は見られる。例えば文献 10。
- (15) ベイルートのラフィーク・ハリール空港(1954)はルコントの作品である。
- (16) 本稿では工法の詳細には踏み込まないが、文献 6 に概括されている。
- (17) パイオンとマルスルーは、マルセイユ解放直後に従事していた駐留アメリカ軍のための施設整備等の仕事で協働して以来の友人であった。
- (18) コンペの正式名称は「標準化されたプレカット石材の大量生産、輸送、流通のための採石場の設備と機械化(1'Équipement et la Mécanisation des Carrières pour la production en série, le transport et la distribution de la pierre prétaillée standardisée)」であった。文献 20。
- (19) <https://www.fernandpouillon.com/sud-est.html#fontvieille>(21.04.25 閲覧)。
- (20) マルスルーは、石材標準化・プレキャスト化公社 Société française de la pierre normalisée et prétaillée (SFPNP) の部長を勤めた。文献 20。
- (21) パイオンはこれを「マルスルー石(pierre Marcerou)」と呼び、続くアルジェ

- 三地区(1953-1959)においても船で輸送され利用された。文献 30。ただしラトゥーレットでは間に合わず用いられていない。
- (22) パイオンはまた通り沿いのエスマニユ邸を補修しエクス大学学長宅とした。
- (23) フルタイトルの邦訳は『工匠—修道院の誕生:プロヴァンスの 3 つのシトー会修道院の実測から 1 セナンク、2 シルヴァカンス、3 ルトロネ』となる。
- (24) ナショナリストで生粋のマルセイユ人であったカルリーニは、旧港のファサードはオテル・デュエに代表される歴史建築のようであるべきだと主張し、新しすぎる(trop moderne)建築には公然と疑問を呈した。文献 5, p.124。
- (25) 戦中よりベルナル・ゼルフェスらと共にチュニジア、スーダン、ダカールといった仏語圏を中心に活動し、大臣の「友人兼特別顧問」となっていた。
- (26) この過程は自伝に詳しいが、文献 16, pp.134-135 でも触られている。
- (27) 建築高等評議会はヴァンシー政権時代の 1940 年に教育省美術総局(Direction des Beaux-Arts, Ministère de l'Éducation nationale)内に設置された建築審査機関で、フランス建築家協会(Ordre des Architectes)会員から選出された評議員からなっていた。戦後に全国評議会と地方評議会に再編された。
- (28) ピエール・ピュージェとあるのはガスパール・ピュージェ(ピエールの兄)の誤り。
- (29) 序文には、「本書はプロとしての関心から作成された、エクスの古い町の実測から得られた良い建築・都市計画の事例である」とある。
- (30) 文献 18, pp.148-149。はっきりと、「パイオンはドフェールに嫌われていたためマルセイユ復興の主建築家になれなかった」とある。

#### 【文献】

- 1) anon : Marseille fait peau neuve, *Le magazine français*, n.6, 1942, pp.22-23.
- 2) anon : Plan de Marseilles en 1914, *handbook for travellers*, Karl Baedeker, 1914.
- 3) Bédarida, Marc : *Fernand Pouillon*, Editions du Patrimoine, 2012.
- 4) Benoit, Fernand : The new excavation at Marseilles, *American journal of archaeology*, 53-2, pp.237-240, 1949.
- 5) Bonillo, Jean-Lucien : *La reconstruction à Marseille : Architectures et projets urbains 1940-1960*, Imbernon, 2008.
- 6) Caruso Adam and Helen Thomas (eds.) : *The stones of Fernand Pouillon*, gta Verlag, 2013.
- 7) Cristofol Jean, Raymond Aubrac, et al. : *Batailles pour Marseille*, Frammarion, 1998.
- 8) Dalloz, Pierre : *Memoire de l'ombre*, Linteau, 2012.
- 9) Dell'Umbria, Aléssi : *Histoire universelle de Marseille : De l'an mil à l'an deux mille*, AGONE, 2006.
- 10) Kison, Simon : French Police, German Troops and the destruction of the old districts of Marseille, 1943 in Louis A. Knafla(ed.) *Policing and war in Europe*, pp.133-145, Greenwood Press, 2002.
- 11) Pierre Frey, Jean : Marseille, précisions sur la reconstruction du Vieux-Port, 2019. <https://www.espazium.ch/fr/actualites/marseille-precisions-sur-la-reconstruction-du-vieux-port>(21.04.25 閲覧)
- 12) Pouillon, Fernand : *Ordonnance*, Cercle d'Etude Architecture Aix-en Provence, 1953.
- 13) Pouillon, Fernand : Marseille Groupe d'habitations de la Tourette, *Techniques & Architecture*, 16 serie n.3, pp.87-88, 1956.
- 14) Pouillon, Fernand et Jean Babinot : *Maitre d'œuvre : Naissance d'une abbaye En sus les relevés des trois abbayes cisterciennes sis en Provence... Senanque... Sivacane... Le Thoronet*, F. de Nobele, 1962.
- 15) Pouillon, Fernand : *Mémoires d'un architecte*, Paris, Edition du Seuil, 1968.
- 16) Pouvreau Benoit : *Un politique en architecture -Eugène Claudius-Petit(1907-1989)*, Le Moniteur, 2004.
- 17) Régis Bertrand (dir.) : *Histoire d'une ville : Marseille*, Scéren, 2013.
- 18) Unger, Gérard : *Gaston Defferre*, Fayard, 2011.
- 19) Uyttenhove, Pieter : *Beaudouin et Lods*, Editions du Patrimoine, 2012.
- 20) Yvan Delemontey : *Industrialiser la pierre*, Moniteur, 2007. <https://www.lemoniteur.fr/article/industrialiser-la-pierre.465829>(21.04.25 閲覧)
- 21) ヴァルター・ベンヤミン(川村二郎訳) : 都市の肖像, 晶文社, 1975.
- 22) 西田雅嗣:シトー会建築のプロポーション, 中央公論美術出版, 2006.
- 23) 長谷川堯: 過ぎし時代への挽歌, *新建築*, 52 巻 3 号, p.266, 1977.3.
- 24) フェルナン・パイオン 荒木亨(訳) : 石叫ぶべし, 文和書房, 1976.
- 25) フェルナン・パイオン 荒木亨(訳) : 粗い石, 形文社, 2001.
- 26) 深沢克己: マルセイユの都市空間, 刀水書房, 2017.
- 27) 前川道郎: 聖なる空間をめぐる フランス中世の聖堂, 学芸出版社, 1998.
- 28) 松原康介: 国際交流組織 ATBAT の結成と変容, 日本建築学会計画系論文集, 第 82 巻, 742 号, pp.3239-3249, 2017. 12.
- 29) 松原康介: マルセイユ レヴァント貿易の港町, 布野修司(編)『世界都市史事典』, pp.238-239, 昭和堂, 2019.
- 30) 松原康介: フェルナン・パイオンのアルジェ三地区におけるムーア建築的特徴について, 日本建築学会計画系論文集, 第 86 巻, 790 号, 2021. 12.
- 31) 三宅理一: シトー会の建築様式, 磯崎新・篠山紀信(編著)『建築行脚 5 中世の光と石 ルトロネ修道院』, pp.118-165, 六耀社, 1980.
- 32) 吉田綱市: トニー・ガルニエ, 鹿島出版会, 1993.